

大楽寺

大楽寺は、奈良の大寺の 1 つである西大寺の僧侶であった道密によって 1333 年に設立されました。資金は当時宇佐神宮の宮司であった到津公連から提供され、大楽寺は到津家を追悼する寺（菩提寺）となり、位牌は現在も持仏堂というお堂に安置されています。1334 年、後醍醐天皇（1288-1339）の命により、大楽寺は国の平和と保護を祈る義務を負ったお寺である勅願寺になりました。また、神仏習合の時代に、宇佐神宮とその周辺の寺院のために僧侶を厳格に養成しました。大楽寺は現在、高野山真言宗に所属しています。

大楽寺の本堂は、7 体の最も重要な仏像を保管するために特別に建設されました。ご本尊は、1.4 メートルの弥勒の仏像であり、その両脇には、大妙相菩薩と法苑林菩薩というほぼ対称的な 2 体の弥勒の随伴者の像があります。弥勒は菩薩であり、遠い将来に歴史上に実在した仏陀である釈迦の後継者として次の仏となるためにこの世に現れます。大楽寺にある像は、弥勒を蓮の台座に座った如来として表しており、右手は恐れを払拭する仕草で持ち上げられ、左手は手の平を下にして膝に置かれています。この三尊は、弥勒を四つの方角から守護する天王である、持国天（東）、増長天（南）、広目天（西）、多聞天（北）に取り囲まれています。すべての像は、平安時代（794-1185 年）後半に寄木造という技術を用いて檜から彫られており、国の重要文化財に指定されています。

大楽寺には他にもたくさんの貴重な寺宝があります。本堂の陳列ケースには、開祖である道密上人が使用していたと伝えられる五鈷杵という法具や、その一部が真言宗の開祖である空海（弘法大師、774-835）によって書かれたと伝えられている般若心経の手書きの巻物が展示されています。持仏堂には、6 本の腕を持つ姿で表現された慈悲の菩薩の如意輪観音像が安置されています。寺伝によるとこの仏像は、13 世紀の叙事詩である平家物語にも登場した強力な武家の平家の一員であった平重盛（1138-1179）のものでした。

大師堂・護摩堂は、お経を唱えたり祈祷用の薪を神聖な火で燃やしたりする護摩供養のために利用されています。その中には不動明王の像や、空海の像、88 体の小さな仏像（1 体ずつが、弘法大師空海で有名な四国霊場の 1 ヶ所に相当している）があります。境内には、いくつかの菩薩や明王などの石造、石塔があり、鐘楼にある 1382 年作の大きな梵鐘は大分県最古の国産の梵鐘となっています。

大楽寺は宇佐神宮のすぐ北、神橋から遠くないところにあります。参拝は自由にできますが、本堂への入場は有料です。